

## 論 文

# グライスの意味理論における「自然的意味」の位置づけについて

清 塚 邦 彦

### 1 はじめに

グライスの意味理論と言えば、言語的な意味の概念を心理的な意図の概念に還元しようとする研究プログラムで知られる。より丁寧な言えば、語や文を主語とした意味の概念は、発話者を主語とした意味概念に基づいて説明され、それがさらに発話者の伝達意図に基づいて説明されるというのがグライス理論の構図である。本稿が関わるのはこの後半部分、つまり、発話者の意味を伝達意図の概念に基づいて定義しようとする部分である。言語的な意味の概念については本稿では特に立ち入らない。

発話者の意味に関するグライスの分析は、直接には、発話者を主語として語られる英語動詞‘mean’あるいは名詞形‘meaning’の分析という体裁で提示されている。とはいえ、それが言語哲学において注目を集めてきたのは、そこからコミュニケーションの基本構造について貴重な洞察が得られるとの期待が広く共有されてきたことによる。本稿もそうした見通しを共有している。

ところで、グライス理論の輪郭は意味概念に関するいくつかの概念的な二分法によって画定されている。意味の概念は、まずは自然的意味と非自然的意味という二つの部類へと区分され、後者はさらに、発話者が意味することがらと、語や文（発話タイプ）がもつ意味へと区分され、その後者がまた、語や文がある特定の場面において持つ意味と、場面に限定されない無時間的な意味へと区分されるという具合である<sup>1</sup>。これら一連の区分の中で、本稿での考察の焦点となるのは、グライス理論において最も中心的な役割を演じる発話者の意味（utterer’s meaning）に関する分析であり、またそれが自然的意味／非自然的意味という総括的な区別に対して持つ位置づけである。グライスの理解では、発話者が意味する事柄は、自然的な意味とは背反的な非自然的な意味の一種であり、非自然的な意味の領域全般を特徴づける際のよりどころとされる。本稿は、発話者の意味という概念を発話者の意図に基づいて理解するグライス流の枠組みを基本的には支持する立場から、そこに寄せられてきた代表的批判のいくつかについて検討し、修正案を提案する。取り上げる批判はどれも、発話者の意味と自然的な意味との関係をどう理解するかという問題と密接に関連している<sup>2</sup>。本稿では、それらの批判が致命傷には至らないことを明らかにすると同時に、

1 論文「発話者の意味と意図」第1節（Grice (1989), pp.88-93 [邦訳133-140頁]）を参照。

2 したがって、本稿はグライス流の分析に寄せられてきた多様な批判について包括的な評価を目指すものではないという点は、あらかじめ断っておかなければならない。

自然的な意味という概念の位置づけに関してグライス理論には大きな見直しが必要であることを指摘する。発話者の意味は、自然的な意味と背反的な現象ではなく、むしろそれをある重要な仕方  
で内蔵している、というのが本稿の立場である。

以下、第2～第4の三つの節では、自然的意味／非自然的意味の区別ならびに発話者意味の概念に関するグライスの基本論点を確認する。それを踏まえて、第5～第8節では、発話者の意味に関するグライスの分析に寄せられてきたいくつかの異論の検討を手がかりとしながら、自然的な意味の概念が、非自然的意味の単純な対概念ではなく、むしろその構成要素の一部であることを明らかにしたい。

## 2 自然的な意味と非自然的な意味

自然的な意味の概念に関するグライスの見解が示されているのは、論文「意味」の冒頭部と、論文「意味再論」の第二節である。本節では論文「意味」での説明に沿って区別の基本的趣旨を確認しておきたい。「意味再論」については第4節で取り上げる。

「自然的」という名称からまず連想されるのは、煙が火の存在を示したり雲が雨の到来を告げたりといった自然的な因果関係を基盤とした意味作用だが——じっさいまた、これらはグライスの意味での自然的な意味の重要な事例であるが——グライスが自然的意味の概念に与えている説明には、自然的な因果関係への言及は見られない。彼はむしろ、それぞれの意味での「意味する」の代表例として二三の例文を挙げた上で、それぞれの特徴となる5つの言語的事実を枚挙している。

まずは、グライスが挙げている自然的意味の例文三つと非自然的意味の例文二つを再録しておこう。

### [自然的意味の例文]

あの発疹は麻疹を意味している (いた)。

あの発疹は、私には何の意味もなかったが、医者には麻疹を意味していた。

今度の予算案は来年度が厳しい年になることを意味している<sup>3</sup>。

### [非自然的意味の例文]

あんなふうに (バスの) ベルを三回鳴らすのは、バスが満員だという意味だ。

「スミスは山の神 (his trouble and strife) がいないと暮らしていけない」というあの発言は、スミスが自分の妻をかけがえのないものだと思っているという意味だった<sup>4</sup>。

3 *Ibid.*, p.213 [邦訳223頁]

4 *Ibid.*, p.214 [邦訳224-5頁]

自然的意味の例文にはさしあたり補足はないが、非自然的意味の例文には若干の背景説明が必要である。ベルの事例は、ロンドンの公共バスでの1957年当時の慣例を背景としており、満員時には車掌がベルを鳴らすという慣習的な振る舞いの意味を話題にしたものである。また、仮に「山の神」と訳した“his trouble and strife”は、ロンドンの下町言葉（コックニー）に由来する言い回しの一例とされ、単に「妻」と言うのと同義である<sup>5</sup>。上の例文はこれらの振る舞いや言い回しの積義で用いられる「意味する」のサンプルに当たる。

以上を最低限の注釈とし、以下、両グループの特徴としてグライスが挙げる5つの言語的事実を順次見ていこう<sup>6</sup>。

(1) 自然的な意味の事例では、「xはpということの意味していた(いる)」という言明は「p」を含意する(entail)のに対して、非自然的な意味の事例ではそのような含意は成り立たない。

例えば、「あの発疹は麻疹を意味していた」という発言が自然的な意味での「意味する」の事例だと解されている限り、この発言に続けて「しかし彼は麻疹ではなかった」と付け加えることはできない。また「今度の予算案は来年度が厳しい年になることを意味しているが、しかし来年度が厳しい年になることはないだろう」と言うこともできない。他方、「ベルを三回鳴らすのは、バスが満員だという意味だ」という発言に続けて、「しかし実はバスは満員ではなかった ----- 車掌がまちがえたのだ」と言うことは可能だし、また、二番目の文[「山の神」の例文]を用いた上で、それに続けて「しかし実はスミスは七年前に妻を捨てた」と言うこともできる。

ここでの対比のポイントは、「意味する」という言い方が、意味された内容に相当する一定の事実が成立することを、含意しているかどうかの違いである。自然的な意味での「意味する」は、意味された事柄が事実として成立していることを含意している。もしもそれが事実でないならば、「意味する」は偽であることになる。

他方、非自然的な意味での「意味する」はそのような含意関係には縛られない。それは意味される事柄が事実として成り立つかどうかとは独立である。先ほどの、ベルを三回鳴らす振る舞いがバスの満員を意味すると言われる場合の「意味する」は、実際にバスが満員であることを意味の一部とはしていない。ベルが三回鳴らされながら満員でないこともありうる。その場合でも、非自然的な意味での「意味する」という言い方は成立している。

(2) 自然的な意味の事例では、「 $\dot{\sim}$ によって意味された事柄 (what is (was) meant by  $\sim$ )」を主題としたいかなる結論も導くことができないが、他方、非自然的な意味の事例では、「 $\sim$ によって意味された事柄」について何ごとかを導くことができる。

グライスの例で言えば、「あの発疹は麻疹を意味している(いた)」からは、「あの発疹によっ

5 これらの背景については McGinn (2015), pp.193-194に教えられた。

6 以下の5つの基準に関するグライスの論述は Grice (1989), p.213- 4 [邦訳223-225頁]にある。

て意味されている（いた）事柄」についてどのような結論も導けないのに対して、「ベルを三回鳴らすのは、バスが満員だという意味だ」からは、ベルを鳴らすことによって「意味されている（いた）事柄」に関する何らかの言明を導くことができる。

この二番目の対比は、先の（１）を別の観点から捉え直したものとして受け取るのがわかりやすい。

一定の発疹が麻疹を意味するという発言は、その意味の一部として、事実麻疹が生じていることを主張している。そして、もしも麻疹が生じていないならば、「意味する」という言い方はこの場面では間違いであることになる。他方、ベルの事例では、ベル三鈴はバスが満員であることを意味するが、ベルが三鈴されていながら現実にはバスが満員でないこともありうる。この場合、意味されている内容は、現実が生じている事実とは独立した一定の内容である。

基準（２）においてグライスが「～によって意味されている事柄」という言い方で問題にしているのは、この後者の意味での意味内容の存否だと考えられる。自然的な意味の事例では、意味作用を支えているのは、一定の事実が成り立つときには他の一定の事実が成り立つという事実的な連関である。そして、その事実的な連関を越えて維持される意味内容は存在しない（pが成り立たなければ「pを意味する」とは言えない）。他方、非自然的な意味の場合には、意味される事柄は必ずしも事実とは一致しない。

（３） 自然的な意味の事例では、誰かが発話によって意味する事柄についていかなる結論も導けないのに対して、非自然的な意味の事例では、そのような結論を導くことができる。

例えば、「あの発疹は麻疹を意味していた」からは、その発疹によって誰かがこれこれのことを意味していたという内容のどのような結論も導けないのに対して、ベル三鈴の事例からは、「誰か（つまり車掌）がベルを鳴らすことによってバスが満員であることを意味していたことか、少なくとも意味していたはずだったことを結論できる」<sup>7</sup>。

この基準（３）は、（１）と（２）で指摘された《事実からは独立した意味内容》の成立背景を示唆するものであり、具体的にそれが伝達意図を持った発話者の存在として特定される。自然的な意味の事例には、「意味する」の主語に該当するような人は介在していないが、他方の非自然的な意味の事例は、誰かに何かを伝えようとする人の存在と不可分である。

これは決して、自然的な意味の事例には人が登場しないということではないし、それどころか、人の発言行為が関与しないということでもない。グライス自身の例を見ても、麻疹の事例で医師が「これは麻疹を意味する」と言うさいには、その背景として、医師に患部を提示している患者の存在が欠かせない。またもちろん、予算案の策定には多くの人が関わっている。とはいえ、そうした背景のもとで語られている意味作用は、特定の誰かが能動的に行う行為の性格は持ってい

7 Ibid., p.214 [邦訳225頁].

ない。

(4) 自然的な意味の事例では、引用符で括られた語句を主語とする形での言い換え（『……』はしかじかのことを意味する（しかじかという意味だ）」という形での言い換え）ができないのに対して、非自然的な意味の場合にはそれができる。たとえば、『あの発疹は麻疹を意味していた』を『あの発疹は「麻疹」を意味していた [という意味だった]』とか『あの発疹は「彼は麻疹だ」を意味していた [という意味だった]』とかと言い直すことはできない<sup>8</sup>のに対して、ベル三鈴の事例は、「あんなふうにベルを三回鳴らすのは『このバスは満員だ』という意味だ」というふうに言い換えることができる。

この基準(4)が確認しているのは、端的に言えば、二種類の意味作用のうちで、言語的な意味の概念と親密性を持つのは非自然的な意味の方だという事実である。ただし、グライス自身はそのようなストレートな言い方はしておらず、単に英語の語法に関する事実の確認として述べるにとどめている。

(5) 自然的な意味の事例では、趣旨を変えることなく、「～という事実 (The fact that ~)」を主語とする形での言い換えが可能なのに対して、非自然的な意味の事例では、そのような言い換えができない。あるいは、あえて言い換えた場合には趣旨が変わってしまう。

例えば、発疹や予算の事例は、「彼にあの発疹があったという事実は、彼が麻疹であることを意味していた」とか、「今度の予算案が発表された通りのものだったという事実は、来年度が厳しい年になることを意味している」とかと言い換えがきくが、他方、『ベルが三回鳴らされたという事実は、バスが満員だということの意味している』といった文は、最初の文と同じ意味の言い換えではない。両方とも真ではあるかもしれないが、それらはおおよそにすら同じ意味だとは言えない<sup>9</sup>。

先に基準(1)で指摘されていたのは、自然的な「意味する」が、意味される事柄の事実性を含意しているという事情だった。この最後の基準で指摘されるのは、自然的な「意味」の働きの起点となるもの（いわば、「意味する」側）もまた、一定の事実だという事情である。例えば、「あの発疹は麻疹を意味している」の場合には、意味作用の起点に当たるのは患者の身体に現に一定の発疹が見られるという事実であり、また、「今度の予算案は…」の事例では、一定の予算案が採択されたという事実だというふうに。

他方、非自然的な意味の事例は、これと同じ仕方でも事実を起点とするものではない。例えば「ベルを三回鳴らすのはバスが満員だという意味だ」の事例で問題となっているのは、特定の場面でベルが三回鳴らされたという事実を起点とした意味作用ではない。問題となっているのはむしろ、

8 *Ibid.*, p.213 [邦訳224頁].

9 *Ibid.*, p.214 [邦訳225頁].

その場の事実と合致したりしなかったりする一定の慣例の意味である。

さて以上の一連の指摘から浮かび上がってくるのは、どんな展望だろうか。見通しはあまり良好とは言えないが、いくつかの点は明瞭である。一方では、グライスの言う自然的な意味での「意味する」は、一連の事実の間に不可分のつながりが成り立っているという事情を踏まえた上で、そこに付随する形で語られるものであること。また、他方では、非自然的な意味での「意味する」は、意味するものの点でも、意味されるものの点でも、事実やその連関とは独立性を保っていること。そして第三に、そうした独立の意味とはいかなるものであり、いかにして成立するのかについて、当面与えられている示唆は、それが一定の慣習的ふるまいや、それを用いて発話を行う人とつながりを持つという着眼点だということである。次の節では、その着眼点をさらに展開した「発話者の意味」の特徴づけに目を向けよう。

### 3 発話者の意味

グライスは論文「発話者の意味と意図」の第二節で、非自然的な意味の領域を四つに区分している<sup>10</sup>。

- a. 発話タイプのもつ無時間的意味,
- b. 発話タイプの持つ適用された無時間的意味,
- c. 発話タイプの持つ場面意味,
- d. 発話者の場面意味

大雑把に言えば、語や文に帰される辞書的な意味に当たるのがaやbの無時間的意味である。辞書の記載を思い起こせば分かるように、多くの語の場合、語義説明は複数の項目に分かれている。その中で、特定の場面で用いられている語義に当たるのがbである。他方、それとは別建てでcが設定されるのは、発話タイプがある特定の場面で通例の辞書的な意味からは逸脱するような意味をもつ場合があることに配慮してのことである。最後の発話者の意味は、発話者が発話を通じてある特定の場面において意味する事柄である。

グライスは論文「発話者の意味、文の意味、語の意味」で、発話タイプの意味を発話者の意味に基づいて説明する道筋について論じている。その成否については評価が分かれるが、グライスが非自然的な意味について考えるときに、dの部類をその最も基礎的な事例と見ていたという点は一般的な了解事項と見てよいだろう。以下で確認したいのはその「発話者の意味」に関する分

---

<sup>10</sup> *Ibid.*, p.88-93. [邦訳133-140頁。]

析内容である。発話タイプの意味が発話者の意味に基づいて説明されるとするいわゆる「グライスのプログラム」の是非については、本稿では立ち入らないことを断っておきたい。

発話者の意味を問うさいにグライスが念頭においているのは、発話者が受け手に向けて言葉を発したりその他の身振り等を行ったりすることで一定の内容を伝えよう（「意味」しよう）とする場面である。「発話 (utterance)」とは、グライスの議論では、こうした状況で行われる言葉を発したり身振りを行ったりする行為の総称である<sup>11</sup>。それは必ずしも「語」を発することではなく、非言語的なふるまいも含まれる。グライスが問題とするのは、発話者がこの広い意味での発話を通じて何ごとかを意味したと言えるための必要十分条件は何なのかという点である。

この問いに関して、グライスが最初の素案として提示したのは次のような分析である。

……「x が何ごとかを意味<sub>NN</sub><sup>12</sup>する」が真であるのは、発話者が x によってある「受け手」のうちにある信念を生じさせようと意図している場合であり、それがどんな信念であるかを述べれば、x が何を意味<sub>NN</sub>したかを述べたことになる<sup>13</sup>。

これは一見常識的な見方だが、このままの形ではうまくいかない。それには二重の背景がある。一つは、ここで想定されている相手方の反応が、限定されすぎていることである。グライスによれば、人が発話を通じて相手に生じさせようと意図する反応は、信念だけではない。依頼や命令の性格を持つ発話行為の場合には、意図されているのは相手方の行為だ、と論文「意味」のグライスは見ている。そうした事例もカバーするには、上記の「信念」は「反応」と置き換える必要がある<sup>14</sup>。

しかし、より根本的なのはもう一つの問題点である。グライスはそれを簡潔に次のように整理している。

B 氏が殺人犯だという信念を刑事に抱かせるために、殺人現場の近くに私が B 氏のハンカチを残しておくということもある。だがわれわれは、そのハンカチ（あるいは、私がそれを殺人現場の近くに残してきたこと）が何ごとかを意味<sub>NN</sub>したとか、ハンカチを残しておくことによって私が、B 氏が殺人犯であることを意味<sub>NN</sub>したとかというふうには、言いたくないはずである<sup>15</sup>。

11 *Ibid.*, p.92. [邦訳139頁。]

12 「意味<sub>NN</sub>する」は、非自然的な意味での「意味する」を表示するためにグライスが考案した表記法であり、'NN' とは 'non-natural' の略記である。Cf. *ibid.*, p.214 [邦訳226頁]。

13 *Ibid.*, p.217 [邦訳230頁]。

14 論文「発話者の意味と意図」では、さらに、相手に一定の信念を引き起こすことが意図される事例にだけでなく、発話者がその内容の信念を持っているという信念を相手に促すような事例についても配慮が行われる。これについては本稿第6節で改めて触れる。

15 *Ibid.*, p.217. [邦訳230-231頁。]

問題状況をより際立たせるため、次のような三種類の事例を並べて比較しよう。

(a) 殺人事件の現場を調査した刑事が、そこに落ちていたB氏の所持品を証拠として犯人がB氏だと特定する。

(b) 殺人事件の現場を目撃した人が、警察に犯人を知らせるために、しかし自分自身は事件と係わることを避けるために、犯人の所持品をこっそり現場に落としておく。それを見つけた刑事が、それを証拠として犯人を特定する。

(c) 殺人事件の現場を目撃した人が、警察署に出向いて目撃証言を行い、それにもとづいて刑事が犯人を特定する。

(a) には、何ごとかを伝えようとする発話者が存在しない。もしもこの状況で「現場にしかじかのハンカチが落ちていたことは、犯人がB氏であることを意味する」と言うならば、そこでの「意味する」は自然的な意味だと考えられる。他方、(c) の事例では、目撃者が伝達意図を伴って行く「B氏が犯人だ」という目撃証言は、額面通り、B氏が犯人であることを（少なくとも、目撃者がそう信じていることを）意味していると言われてよいと思われるし、その場合の「意味する」は非自然的な意味に該当すると思われる。

しかし、(b) については (c) と同様な判断はできない、というのがグライスの判断である。それは端的な直観として述べられているわけだが、(a) ~ (c) の比較に照らして考えれば、次のように敷衍できるだろう。つまり、(b) の事例において、発話者は相手に一定の事柄を信じさせようという伝達意図を抱いており、その点では (c) と共通だが、しかし、(b) では、発話者はその伝達意図を相手に隠している。その結果、相手側は、自分が抱いた信念が相手の伝達意図からの帰結であるとは考えていない。むしろ、受け手は、自分が置かれているのは (a) のような自然的意味の事例だと考えているのであり、自分が得た信念は、自分が察した事柄であって、相手から伝えられた事柄ではないと考えている。それゆえ、これを自然的な意味の事例とみなすのはふさわしくない。

グライスの次の発言は、こうした考察を整理したものにあたる。

少なくとも次のことが付言されなければならないことは明らかである。つまり、xが何かを意味したのであるためには、xが一定の信念を生じさせる意図と共に「発話され」たのでなければならないだけでなく、さらに、発話者が発話の背後にある意図を「受け手」に認識させる意図を持っていたことが必要である<sup>16</sup>。

16 *Ibid.*, p.217. [邦訳231頁。]



要するに、発話者の意味が成立するためには、相手方に一定の反応を生じさせようという意図に加えて、その意図の存在を相手に知らせようという第二の意図が必要だということである。グライスの分析を際立たせている最も大きな特徴の一つは、この第二の意図への注目にある。人が他人にpということを伝える行為に、pということを相手に知らせようという意図が伴うこと自体は、大まかな形では、誰もが思い浮かべるところである。しかし、そこにさらに、pということを相手に知らせようという意図を相手に知らせようという意図が伴い、それがコミュニケーションの成立を理解する上で重要だという事情は、グライスの指摘を待つまで、主題化されたことがなかった。その点に注意を喚起し、意味と意図のつながりの構造に注目したことは、グライスの重要な功績の一つである<sup>17</sup>。

しかし、分析はまだ終わりではない。上記の点を確認したうえで、グライスにはさらに別種の問題事例を挙げる。

- (1) ヘロデが洗礼者聖ヨハネの首を大きな皿に載せてサロメに差し出す。
- (2) めまいを感じた子供が母親に気分の悪そうな様子を見せる（母親がみずから気づいて助けてくれることを期待しながら）。
- (3) 私が娘の割った陶磁器を妻の目にとまるように放置しておく<sup>18</sup>。

これらが問題的な事例だという点は、先ほどの「事件現場のハンカチ」の事例ほど明白ではない。現に、少なからぬ解釈者は、これらの事例の問題性を明確に否定している。とはいえ、その点には後ほど立ち返る。ここではグライス自身の問題認識を確認しておく。

グライスの認識では、(1)～(3)の事例は、いずれも、相手に何ごとかを伝えようとする伝達意図を含む事例であり、さらに、それらの意図を相手に知らせようというもう一つの意図を含む事例でもある。それ故、これらの事例は、つい先ほどの改訂版の定義には適っている。ところが、グライスによれば、これらの事例では、発話者が何ごとかを非自然的な意味において「意味している」とは言えない。

しかし、なぜ言えないのか。グライスはその理由を次の二事例の比較を通じて解説している。

- (1) X夫人に対して妙に打ちとけた振る舞いをしているY氏の写真を私がX氏に見せる。
- (2) 私がそのような振る舞いをしているY氏の絵を描いてX氏に見せる。

……これら二つの事例の違いはどこにあるのか。もちろんそれは次の点にある。つまり、事

17 例えばスペルベルとウィルソンは、グライスの分析の中でもこの第二の意図の指摘を重く見ており、この第二の意図が実現しさえすればコミュニケーションは成立するという点を、グライスの洞察の要点と見ている。Cf. Sperber and Wilson (1986) p.23, pp.28-29. [邦訳30頁, 33-34頁。]

18 Grice (1989), p.218. [邦訳231頁。]

例（1）では、Y氏とX夫人の間に何かがあるとX氏が思うという結果が、そのような信念をX氏に抱かせようという私の意図をX氏が認識することとは（多かれ少なかれ）無関係に、写真によって引き起こされている、という点にである。たとえ私が、写真をX氏に見せたのではなく、うっかりその写真をX氏の部屋に置き忘れたという場合でも、X氏は写真を見れば、X夫人に少なくとも不審の思いを抱くことにはなるだろう。そして、写真を示すときの私にもそのような事情はわかっているだろう。しかし、私の絵がX氏に及ぼす結果に関しては、X氏が私のことを《X夫人に関することを彼に知らせよう（何ごとかを彼に信じ込ませよう）と意図しているのであって、たんにいたずら書きをしたり芸術作品を作ろうとしたりしているのではない》と考えるかどうかという点が、大きな影響力を持つだろう<sup>19</sup>。

ここでのグライスの論点を図式的に整理しておこう。

写真の事例と手描きスケッチの事例は、どちらも、相手に一定の信念を抱かせようという意図を伴う点でも、またその伝達意図の存在を相手に知らせようという意図も伴っているという点でも、共通している。しかし、両者の間で異なるのは、この二番目の意図の役割である。スケッチの事例では、相手は、発話者の伝達意図を察知した上で、その認識を踏まえて、その伝達意図の通りに一定の事柄を信じる。他方、写真の事例では、伝達意図の認識にはこのような役割（最終的な信念の理由になること）がない。X氏が妻の浮気を信じるのは、写真を見たからであって、妻が浮気をしているという私の伝達意図を察したからではない。

先の一連の例文にも同様の説明が成り立つ。例えば、ヨハネの首の事例においてサロメがヨハネの死を信じるのは、眼前にヨハネの生首があるからであり、ヘロデ王の伝達意図を認識したからではない。また、母親が子供の体調不良に気づくのは、子供の様子を見たからであり、子供の意図を察したからではない。さらに、娘が陶磁器を割ったことを妻が知るのは、陶磁器が割れているからであり、私の伝達意図を察したからではない。これら一連の事例では、発話者の伝達意図に関する認識が、当の伝達意図を実現すべき理由として機能していない、というのがグライスの着眼点である。

以上の考察を踏まえて、最終的な分析結果は次のように要約される。

「Aはxによって何ごとかを意味した」は「Aはある一定の反応を抱かせようという意図と共に、しかもその意図を認識させることによってその信念を抱かせようという意図と共に、xを発話した」と（ほぼ）同等である。そして、付け加えて言えば、Aが何を意味したかを問うことは、意図されている効果を特定するよう求めることにほかならない<sup>20</sup>。

19 *Ibid.*, p.218. [邦訳232頁。]

20 *Ibid.*, p.220. [邦訳235頁。]

ここには三通りの意図が関与している。つまり、第一は、相手に一定の反応を生じさせようとしている意図であり、第二は、その意図を相手に知らせようという意図であり、さらに第三に、第一の意図を相手に知らせることで、相手はその認識を踏まえてその第一の意図の通りの反応を来すことをめざした意図（第三の意図）である。グライス自身は、論文「発話者の意味と意図」では、こうした事情を次のように整理している。

「Uはxを発話することで何ごとかを意味した」が真であるのは、ある受け手Aに関して、Uが次のことを意図しながらxを発話した場合であり、その場合に限られる。

- (1) Aに特定の反応rが生じること
- (2) Aが、Uは(1)を意図している、と思う(認識する)こと
- (3) Aが、(2)の実現を踏まえて(1)を実現すること<sup>21</sup>。

グライスによれば、一般に発話者の意味は、第一条件で特定された反応「r」の中身を記述することによって記述される。そして、第三条件が確認しているのは、反応rを生じさせようという意図が、その意図を相手に知らせることによって実現されるという一種自己言及的な構造である<sup>22</sup>。

(以下では、この定式化の(1)～(3)のことを「第一条件」～「第三条件」と呼び、その各々において特定されている意図のことは、「第一の意図」～「第三の意図」と呼ぶ。)

#### 4 自然的な意味 再考

グライスの論点確認の最後として、本節では、グライスが自然的な意味と非自然的な意味の関係について論文「意味再論」の第二節で述べている事柄を簡単に確認しておきたい。そこでは、両者の共通点を確認した上で、自然的な意味から非自然的な意味への段階的発展とでも呼ぶべきつながりが指摘される。

「自然の意味」と「発話者の意味」の間の共通点として指摘されるのは、広い意味での帰結関係である。グライスはそれを次のように特徴づけている。

……もしもxがyということの意味するなら、そのことは、yがxからの帰結だと主張するのと同じことであるか、少なくともそのような主張を意味の一部として含んでいる……<sup>23</sup>。

21 *Ibid.*, p.92. [邦訳139頁。]

22 Cf. Harman (1974).

23 Grice (1989), p.292. [邦訳274頁。]

しかし、「帰結」といっても、第2節でみたように、自然的意味と非自然的意味の場合では、意味合いは大きく異なる。自然的意味の場合には、 $x$ が $y$ を意味する場合、 $y$ は必ず成り立っていないからではないが、非自然的な意味の場合には、 $x$ が $y$ を意味していながら $y$ が成り立たないこともありうる。こうした二種類の意味作用のあいだの関係をより明確化するため、次にグライスは、自然的な意味の事例から出発して、そこに段階的に修正を加えていく形で最終的に非自然的意味にたどり着く次第を説明していく。

出発点とされるのは、グライスの特徴づけでは、「ある生物  $X$  が意志によらずに一定の行動  $\alpha$  を行い、そうすることが  $X$  が痛がっていることを意味する、あるいは帰結する、あるいはその証拠になる」<sup>24</sup>という事例である。これは、単純な自然的意味の事例である。

次いで、修正の第一段階は、こうである。

問題の生物が、意志によらずに行われればその生物がたとえば痛みを感じている証拠になるようなある種の行動を、実際に、意志によって行う…<sup>25</sup>。

この段階の具体例に当たるのは、自然的な意味の事例を偽装する行為である。前節で触れたハンカチの偽装工作の事例 (a) もここに含まれる。しかし、相手を騙すと否とを問わず、意図的に自然的意味の事例がシミュレートされていれば、それはこの第一の修正段階に属することになる。

修正の第二段階では、第一段階で導入された意図を相手方が認識する、という想定が付け加えられる。「生物  $X$  はいまや、痛みの行動を装うものと想定されているだけでなく、痛みの行動を装うものとして認識されるものとも想定されている」<sup>26</sup>。

先の第一段階の振る舞いは、相手を騙す行為とみなすにしろ、単なるものまねとみなすにしろ、目的について一応の意味付けはしやすい。しかし、第二段階になると、そもそもなぜ、一定の偽装をあからさまに行うのか、趣旨が不明な印象を否みがたい。そして、そうした趣旨不明性は、次の第三段階にも引き継がれる。

第三段階では、発話者の振る舞いが意図的なものであることが認識されるだけでなく、その認識が意図されていることが認識される。グライスの言い方では、「この段階では、われわれは、生物  $Y$  が、問題の行動が  $X$  の意志で行われたことを認識するだけでなく、さらに、 $Y$  が  $X$  の行動を意志によるものと見なすことを  $X$  が意図していることをも認識するものと想定する」<sup>27</sup>。

このふるまいは目的不明である。「問題の生物 [ $X$ ] は、いわば痛みを装っているが、ある意味では、

24 *Ibid.* [邦訳275頁。]

25 *Ibid.*

26 *Ibid.*, p.293. [邦訳276頁。]

27 *Ibid.* [邦訳277頁。]

それが痛みの装いであることを公表している。いったいこれは何のためなのか<sup>28</sup>。そして、それに続く第四段階は、第三段階の趣旨不明な振る舞いが、一種の遊びとして理解される段階として規定される。

しかし、さらにそれに続けて、第五段階では、問題の振る舞いが遊びであることが否定され、むしろ相手に一定の信念を促す行為であることが明らかになる。

この段階では、Yは、Xが遊びに従事していると考えのではなく、Xが行っているのはXが痛みを感じていることをYに信じ（あるいは受け入れ）させようとするのだと考える。つまり、行われた行動が意志によらずに行われたならば事実自然的に意味する（その自然的記号になる）であろう状態にXが置かれていることを、Yに信じ（あるいは受け入れ）させようとしているのだ、というふうに<sup>29</sup>。

ここまでくれば、問題の振る舞いを行う生物は、グライスが発話者の意味に要求する条件を満たしている。これはすでに発話者の意味の事例である。しかし、グライスはさらに、行われる発話の性格に注目してさらに次の第六段階を区別する。それは、行われる発話が、自然的意味の事例に由来するふるまいから、「人工的な伝達装置」に置き換わる段階である。

以上は、グライスの説明では、「自然的意味と非自然的意味の間の概念的つながりを明らかにするために考案された神話」<sup>30</sup>であり、現実の発生過程を記述したものではない。実際、グライスが想定する第二、第三の段階は、実体的に存在するとは考えにくい。また、欺瞞や物まねの行為を実質とした第一段階や、遊び行為を実質とした第四段階も、ここに記された順序で発生するのかどうかは定かではない。とはいえ、そうした中間段階を想定するならば、歴然とした自然的意味の事例に当たる出発点から、歴然たる非自然的意味の事例に当たる第五段階に至るつながりが理解しやすくなる、というのがグライスの説明の要点だと考えられる。

以上のようなグライスの説明は、自然的な意味と非自然的な意味の相互関係だけでなく、それらが一方で嘘やものまねの事例と、また他方で遊戯の事例と、どのような論理的連関を持つかについて見通しを示している点でたいへん啓発的である。とはいえ、私見では、自然的な意味と非自然的な意味（発話者の意味）の間には、こうした中間形態を介したつながりとは別に、さらに、それぞれの典型事例にまで食い込んだ相互関係が存在する。それを明らかにすることが以下の課題となる。

28 *Ibid.* [邦訳276頁。] 訳文中の [ ] 内は筆者の補足。

29 *Ibid.*, p.294. [邦訳277頁。]

30 *Ibid.*, pp.297-297. [邦訳281頁。]

## 5 批判的考察

以上、三つの節にわたって、自然的意味／非自然的意味の区別、ならびに非自然的意味の中心事例にあたる発話者の意味に関するグライスの基本論点を確認してきた。ここから先は批判的な検討の段階である。冒頭でも述べたように、本稿の狙いは、自然的な意味と非自然的な意味の相互関係を明らかにすることにある。以下では、それが最も明瞭な形で露呈する局面の一つとして、発話者の意味に関するグライスの分析、とりわけその第三条件に焦点を絞る。

冒頭で述べたように、グライスの理論的構図では、発話者の意味は非自然的な意味全般の基盤となる事例であり、自然的な意味の事例とは背反的である。しかし、以下では、両者の間に重要な相互連関があることを確認したい。発話者の意味は、グライス自身の分析に照らしても、自然的な意味と背反するものではなく、むしろそれを内蔵しているとするのが穏当だというのが本稿の見通しである。

前節で確認したように、グライスは、自然的な意味から非自然的な意味への段階的な発展を想定しており、その限りでは両者のつながりを決して否定していない。しかし、中間段階を通じてのつながりはあるにせよ、出発点となる自然的意味の事例と、第五、第六段階の非自然的意味の事例の間には、明確な違いが想定されている。私が論じたいのは、まさにそれぞれの意味の典型事例において、実は二種類の意味作用の間に複雑な相互関係が見出されるということである。

抽象的な前置きはこれくらいにして、より具体的な指摘に話を進めよう。最初の糸口として触れたいのは、先ほど問題のみ指摘して先送りしてきた、発話者の意味の分析の第三条件についての考察である。

まずはその概要を再確認しておこう。グライスの分析では、発話者がある発話によって一定の事柄を意味したと言えるためには、発話者の側に三重の意図が存在していることが求められる。すなわち、発話者は、(1) その一定の内容の信念なり行為なりが相手方に生じることを意図していることに加えて、(2) 自分がそのような意図をもっていることが相手に伝わることを意図しており、さらに、(3) 自分がそのような意図を持っているという相手方の知識が、相手方が所期の一定内容の信念なり行為に至る際の理由になることを意図しているのでなければならない。第2節ではそのような分析に至る経緯について説明したが、ここで検討したいのは、第三段階の意図の意義についてである。

以下では次のように論じたい。

グライスの第三条件には、有力な論者の多くから批判が向けられてきた。しかし、グライスの第三条件は、第一条件に微調整を施すことで、十分に維持可能である。と同時に、その微調整は、グライスの考えに沿うものではあるが、グライスが描いた意味理論の全体構図とは背馳するものでもある。それは、第三条件が、自然的な意味作用との緊密な連携を前提していることを明らかにするからである。

## 6 第三条件に向けられた批判 (1)

グライスの第三条件には多くの批判が寄せられてきたが、私見では、それらはどれも、むしろ第一条件がはらむ問題と連動しているとするのが適切であり、第一条件をしかるべく見直すことで解消される。とはいえ、批判の中には、第一条件に関する調整によって比較的簡単に対処できるものもあれば、自然的意味との関係について踏み込んだ考察を要求するものもある。本稿の目的からは、より重要なのは後者の部類だが、まずは、前者の代表例を取り上げ、それらへの対処の方向性について確認しておきたい。それは後者の部類について論ずるさいの基本枠組みともなるからである。

### (a) 学問的な議論の事例

最初の事例は、学問的な議論の文脈での発言がグライスの分析には馴染まないことを指摘するものである。サールは次のように述べている。

……たとえば、私が哲学書を読むとき、その本の著者が述べていることを信ずるにせよ、信じないにせよ、その理由はさまざま考えられる。しかし、私がその内容を信ずるように彼が意図しているということを私が認識していることは、著者が述べることを私が信ずる理由にはならない。さらにまた、その著者が極端な自己中心主義でもない限り、私がその内容を信ずるように彼が意図しているということを私が認識するゆえに私がその内容を信ずるということもまた、著者の意図ではなかったであろう…<sup>31</sup>。

シファーは、意地悪く、同じことをグライス自身の論文執筆の行為に当てはめて見せている<sup>32</sup>。つまり、論文「意味」を発表したグライスは、読者が発話者意味に関するグライスの分析案を信じることを意図し、またその意図が読者に知られることを意図しているが、しかし、読者がグライスの意図の知識に基づいて、それを理由にグライスの分析を受け入れるということは意図していない。つまり読者には決して、「グライスは私に彼の分析を信じさせようという意図を知らせているのだから、彼の分析を信じることにしよう」と考えることが求められているわけではない。むしろ、読者に期待されているのは、関連事実に照らしての公正な評価を通じてグライスの分析の正しさを信じるに至ることである。これはほんの一例だが、類似の事情が学問的な発言行為に

31 Searle (1969), pp.46-47. [邦訳82頁。]

32 Sciffer (1972), pp.42-43: 「……論文執筆時のグライスの一次的な意図は、私たちのうちに意味に関する一定の信念（「概念的」な性格のものではあるが）を生じさせることであったにもかかわらず、グライスは、彼の書いたものが真であると信じるべき私たちの理由が、彼の書いたことが真であると私たちが信じるように彼が意図したという事実であることは、予想も意図もしていなかった」。Cf. Recanati (1986), Neale (1992).

広く当てはまることは明らかである<sup>33</sup>。

この異論への応答を述べる前に、もう一つ、代表的と目されてきた反例に触れよう。それは、相手方がすでに知っている、あるいは信じている事柄を思い出させたり、注意を促したりするたぐいの発言である。

### (b) 確認的な発言の事例

グライスはこんな例を挙げている。

思い出させること：

Q：「ええと、あの女の子の名前は何と言いましたっけ。」

A：「ローズ」（もしくはバラの花を見せる）<sup>34</sup>

これは、相手がある女の子の名前を知っていることをお互いに知っている状況で、名前をど忘れした側が確認的に相手に尋ねる場面に該当する。Aの発言は、相手ですでに問題の女の子の名前を知っていることを承知の上で行われているので、この場合の発話者Aの第一の意図の内容が《女の子がローズという名前だと相手が信じること》だと考えるのは場違いである。既に実現していることを改めて意図する訳にはいかない。では、この場合の第一の意図を《女の子がローズという名前だと相手が思い出すこと》だと考えたらどうか<sup>35</sup>。しかし、その場合には別の不都合が生じる。シファー<sup>36</sup>も指摘しているように、今度は第三条条件に支障が生じるのである。というのも、Aが第一の意図を持つという事情は理解できるが、しかし、その意図についての知識を理由としてQが女の子の名前を思い出すとか、そのことをAが意図しているとかという想定はいささか場違いなためである。目下の事例では、Qが女の子の名前を思い出すのはAの発言がきっかけではあるが、Aの意図についての知識を理由とした推論の結果ではない。

以上はどちらも印象的な批判だが、致命傷とはみなしがたい。重要なのは、これらの事例の評価が、第三条条件よりもむしろ、第一条条件において想定されるべき伝達意図の捉え方にかかっている

33 グライス自身はこの種の事例の一般構造を次のように整理している。「[目下の事例では、] U [発話者] は A [受け手] が r と思うことを意図しているが、A がそのような U の意図を踏まえて信念 r に到達することは期待（また意図も）していない。信念 r を A に生じさせると考えられているのは、[目下の事例では、] 前提であって U への信頼ではない」（Grice (1989), p.107. [邦訳163頁]）。

34 *Ibid.*, p.106. [邦訳162頁。]

35 グライスはそのような解釈を示しており (*ibid.*, p.107. [邦訳162頁])、シファーも、批判に際してその解釈にしたがっている (Schiffer (1972), pp.44-45)。

36 *Ibid.*, p.45. Cf. Neale (1992), p.548: 「いま、ある問いへの答えを『A が今にも思い出そう』だとしよう。U はそのことを承知している。つまり、U は、A が p と思っていることを知っているが、はっきりとは思い出せないことを承知している。そこで、U は、U が p ということを意味するための行為を行うことで、A に p ということを思い出させる。この筋立てでは、U は第一条項で特定された意図を持っているけれども、U が第三条項で特定されている意図を持っている事例とは思われない」。



るといふ点である。ではそれぞれの事例において第一条件の内訳を見直す際の基本的な考え方はどうあるべきなのか。私見では、そのための指針はすでにグライス自身が示唆している。その要点は二項目に分かれる。

(i) グライスは論文「発話者の意味と意図」の中で、表出的 (exhibitive) な発言と勧誘的 (protreptic) な発言の違いについて触れている<sup>37</sup>。前者は「発話者が自分が一定の命題態度を持っているという信念を伝えるために行う発話」なのに対して、後者はさらに、その態度に見合う態度を相手に持たせようとする発言である。発話者の意味に関するグライスの当初の分析案は、発話全般を勧誘的と解するものだった。そこでは、すべての発話が相手の信念や行為の喚起を意図するものと解されている。しかし、目下の問題事例は、むしろ表出的な発話のモデルに沿った分析のほうが穏当である可能性を示唆している。これは、信念が問題となる事例に即して具体的に言うならば、第一条件において想定されるべき相手方の「反応」を、発話者が伝えたい命題 p への信念ではなく、むしろ、《発話者が p と信じていること》への信念として捉え直すことをいみする<sup>38</sup>。

図式化すると、元々の分析では、相手方に期待されていたのは次のような反応である。(ここでは発話者を「U」、受け手を「A」、一定の命題的内容を「p」とする。)

(α)

- (1) A が p と信じること
- (2) 《A が p と信じること》を U は意図している、と A が信じること
- (3) 《A が p と信じること》を U が意図しているのだから、p なのだろう、と A が信じること。

他方、目下の修正案では、相手方に期待される反応は次のようになる。

(β)

- (1) A が《U は p と信じている》と信じること
- (2) 《A が《U は p と信じている》と信じること》を U は意図している、と A が信じること
- (3) 《A が《U は p と信じている》と信じること》を U が意図しているのだから、《U は p と信じている》のだろう、と A が信じること。

37 Grice (1989), p.111. [邦訳170頁。]

38 Cf. グライス「発話者の意味と意図」(ibid., p.107-108. [邦訳162-163頁])。Grandy and Warner (1986), Bach (1987) もこの線に沿う提案を行っている。

表現はやや複雑になるが、内容的にはこちらの方がより穏当であり、先の学術的論議の事例においても、この三条件ならば満たされていると見ることができる。例えば、グライスの論文の例では、グライスは、自らの分析をグライスが信じているという信念を相手に促しており、かつ、その意図が相手に知られることも承知しており、さらに、その知識を理由として相手が、グライスが自らの分析を正しいと信じていると信じることを意図している。それゆえ、学術的な主張の事例についてはグライスの分析に沿う形での対応が可能である。そして、読者がさらに、端的に、グライスの分析が正しいと信じるかどうかは、読者が関連事実の全体をどう評価するかにかかっていることになる。

同様の考察は確認的な発言の事例にも成り立ちそうである。

この事例で厄介だったのは、仮にこの事例で発話者が意図している反応を《女の子の名前が「ローズ」であることを相手が思い出すこと》と解すると、その意図の認識がその意図の実現の理由になるという条件が充たされない、という事情である。意図の認識は、たかだか思い出すきっかけになるだけであって、思い出すべき理由ではない。しかし、目下の事例は、先の図式βに準拠しつつ、その「p」に《問題の女の子の名前が「ローズ」である》という命題を代入してやるならば、グライス流の分析に適合する事例としてとらえなおすことができる。問題の事例では、発話者は、相手が《発話者は女の子の名前が「ローズ」だと信じている》と信じることを意図していると思われるし、その意図が相手に知られることも意図していると思われる。さらに、発話者は、相手はその知識に基づいて、《発話者は女の子の名前が「ローズ」だと信じている》と信じることも、意図していると思われる。それゆえ、修正版の三条件は、確認的な発言をもカバーできている。この場合、発話者の意図に関する相手の知識は、女の子の名前が「ローズ」であることを相手が思い出す理由にはならないが、しかし、女の子の名前が「ローズ」だと発話者が信じている、と信じる理由にはなる。

(ii) こうした修正案について、シファーはさらに二つの異論を述べている。

第一の異論は、この修正が当初の目的に照らせば「著しい後退」であり、改善にはなっていない、とするものである<sup>39</sup>。私見では、この異論は的を射ていない。当初の分析案は、コミュニケーションを、相手に何かを信じさせたり、行わせたりすることとして捉えるものだった。しかし、それは、コミュニケーションをいわば洗脳の応酬としてとらえるモデルだともいえる。他方、修正案は、コミュニケーションがむしろお互いの意向を理解し合うことだという事情を、より正確に反映している。

しかし、第二の異論には一定の対応が必要である。それは、上の修正がまだ不十分であり、問題事例は完全には除去できていないというものである。より具体的にはこうである。学問的な議

39 Schiffner (1972), p.47.

論の事例の場合、議論の当事者は、互いに相手の立場を最初から知っていることも少なくない。その場合、発話者は、相手方が《発話者がpと信じていること》をすでに信じていることを知っている。そして、すでに相手が信じているとわかっている事柄を、改めて相手に信じさせようと意図することはできない。それゆえ、この場合には修正版βの第三条件は充たされない<sup>40</sup>。

同じことは確認的な発言にもあてはまる。「あの子は何て名前だったかな」と問う人は、自分は一時的に失念しているものの、お互いがすでにその女の子の名前を知り、しかじかの名前だという信念を抱いていることを知っている。その状況で「ローズ」と返答発話した人は、正確には決して、相手が《発話者は女の子の名前が「ローズ」だと信じている》と信じることを意図できない。改めて意図するまでもなく、相手がすでにそのような信念を抱いていることを、発話者は知っているのだからである。それゆえこの場合にも、実はグライス流の分析は不正確である。

(iii) この批判への答えの鍵となるのは、グライスも注目している《態度の顕在性》という観点である<sup>41</sup>。

議論の例で言えば、相手方が既に自分の信奉する立場を知っている場合であっても、信奉する命題について相手に改めて議論を仕掛けるときには、発話者は、自分がその命題への信念を今あらためて顕在的に意識していることが相手に伝わることを意図しているのに違いない。それゆえ、伝達意図の内容を、相手が《発話者がpという命題を顕在的に信じている》と信じることを、として捉え直すならば、グライスの第一条件は満たされている。そして、そのような発話者は、当該意図を相手に知らせようと意図し、かつ、相手はその知識を踏まえて、発話者が年来の見解を顕在的に信奉していると信じるように意図しているものと思われる。それゆえ、先の図式βに沿った修正案は、信念の顕在性に関わる規定を織り込むならば、発話者の意味に関して十分に穏当な分析になると考えられる。

同様の考察は「ローズ」の事例にも当てはまる。自分が女の子の名前が「ローズ」だと信じていることを相手が承知していることが明白な状況であっても、先の発話「ローズ！」が行われるようなときには、発話者は、自分がその信念を今あらためて顕在化していることを相手に知らせようと意図していると思われる。さらに、そのような意図の存在を相手に知らせ、相手はその知識を踏まえて発話者の顕在的信念の存在を再確認するという流れにも無理はない。それゆえ、この場合にも、信念の顕在性に関する考察を補うならば、先の図式(β)に沿った修正案は十分に穏当である。

以上の考察はもっぱら相手の信念喚起に関わる事例に即してきたが、類似の考察を相手の行為に向けられた発言にどう当てはめるかについてはさらに検討が必要であろう。とはいえ、これに

40 *Ibid.*, pp.47-48.

41 Grice (1989), p.109, p.110. [邦訳165,167-168頁。]

については詳細は別の機会に譲りたい<sup>42</sup>。

### (c) 第一条件は不要か？

第一条件と密接に連動した形での第三条件批判のもう一つの例として、スベルベルとウィルソンの指摘にも触れておこう。ただしこれは、手強い異論としてではなく、関連する誤解のサンプルとしてである。

スベルベルとウィルソン<sup>43</sup>によれば、グライスの分析に出てくる三段階の意図のうち、コミュニケーションにとって重要なのは第二条件に出てくる意図だけであり、第一、第三の意図は不要なのだという。その論拠は、「I had a sore throat on Christmas Eve. (私はクリスマス・イヴに喉が痛かった。)」という例文についての考察を通じて述べられている。それによれば、メアリーがこの文を発話するとき、第一の意図に該当するのは、前年のクリスマス・イヴに喉が痛かったことをピーターに信じさせる意図である。相手方は、メアリーのこの意図を認識しながら、メアリーの言うことを信じないかもしれない。その場合、グライスが想定する三種類の意図のうち、第二段階の意図だけが達成されるが、第一段階の意図は達成されず、したがってそれと連動して第三の意図も達成されない。それでも、メアリーはピーターを納得させることには失敗したが、意味したことの伝達には成功したと考えられる。それゆえ、第一、第三の意図の達成は意味の成立に不要である——。

これは興味深い考察だが、グライス批判としては失当である。それが失当であるのは、グライスの分析が、そもそも、第一、第三の意図の「達成」を要求するものではないからである。求められているのはそれらの意図の存在である。そして、上の事例でも、メアリーがそれらの意図を持っていること自体は問題視されていない。それゆえ、スベルベルとウィルソンの考察は、上記メアリーの事例においてグライス流の分析が成り立たないとすべき理由にはならない。

## 7 第三条件に向けられた批判 (2)

次に取り上げたいのは、第三条件に向けられた批判の中で、特に発話者の意味と自然的な意味とが複雑に交錯するような事例に関する考察と関連した批判である。先取りして言えば、これらの批判もまた、最終的には第一条件の捉え方と関わっている。しかし、これらに答えるには自然的意味と発話者の意味の関係についてやや踏み込んだ検討を行っておく必要がある。

42 ちなみに、グライス自身は、命令的な発言の場合に相手に期待されている反応を、相手が一定の行為を行うことではなく、相手が一定の行為を行おうと意図すること、として捉え直すことを示唆している。Cf. *ibid.*, p.111. [邦訳170頁。]

43 Sperber and Wilson (1986), pp.28-29. [邦訳34頁。]

## (a) 問題の構図

まずはグライスが第三条件について行っている考察の趣旨を再確認しよう。

グライスの考えでは、ヘロデ王とサロメの事例では、ヘロデ王はサロメに洗礼者聖ヨハネの死を知らせたいという意図を持っており、かつ、その意図をサロメに知らせようという意図も持っている。しかし、この事例では、それらの意図に関する知識は、サロメがヨハネの死を信じるさの理由にはならない、というのがグライスの診断である。この事例では、ヨハネの死を信じるべき理由は眼前に晒された生首にあり、意図の知識はそれに加えてさらなる理由を構成することはできない。もちろん、発話者の側も、そもそもありえないことを意図するわけには行かない。それゆえ、目下の事例は、発話者の意味の事例としてふさわしくない。

こうしたグライスの議論に対して、多くの解釈者は戸惑いを示している。おそらくそこに共通しているのは、サロメの例をはじめとする一連のグライスの事例考察がどこかおかしい、という漠然とした印象である。そうした戸惑いは私も共有している。とはいえ、その印象の由来をどう理解するかについては見方が分かれる。ここでは、更に考察を深めるための手がかりとして、ニールのコメントを取り上げてみよう。

グライスは「意味再論」では自然的意味と非自然的意味との間に繋がりを付けようとしているが、そのことを考慮すると、自然的意味が〔発話者の意味と〕共存するという想定がなぜ問題視されるのかは、私には明らかではない。それゆえまた、(Ⅱ)の第三条項〔＝グライスの分析の第三条件〕が必要とされる理由も明らかではない<sup>44</sup>。

……私が（例えば）金切り声で「私は金切り声で話せる」と言うような発話を考えよう。あるいは、私を探している様子の人に向けて叫ばれる「私はここだ」の発話を。どちらの事例でも、私が自分の言ったことを意味していないと言うべき強い動機は見当たらない<sup>45</sup>。

大掴みに言えば、ニールは、グライスの事例分析への違和感の由来を、グライスが同内容の自然的意味と発話者の意味との共存を認めていないことに求めている。しかし、ニールによれば、両者の共存は当たり前の事実であり、引用箇所ではそのことが具体例を添えて論じられている。そして、ニールでは、そのことが直ちに、第三条件が不要だと結論すべき理由と見なされる。しかし、ではなぜ、それが第三条件の批判につながるのかという点を正確に理解するには、もう少し論点を解きほぐしておく必要がある。私はこのニールの批判に部分的には賛同しているが、しかし、どの部分で賛同し、どの部分で食い違うかを明確にするには準備が必要である。

話に具体性を与えるため、サロメの例に沿って、ニールとグライスの論点を整理してみよう。

44 Neale (1992), p.548. [ ] 内は筆者の補足。

45 *Ibid.*

まず、ニールが明らかに主張し、かつグライスが否定している一つの論点はこうである。

(イ) サロメの事例では、ヨハネの死を内容とする発話者の意味が成り立っている。

他方、グライスとニールは、次を主張する点では一致している。

(ロ) サロメの事例では、ヨハネの死を内容とする自然的な意味が成り立っている。

ニールは、(イ)と(ロ)を共に受け入れるため、さらに次にも同意している。(しかし、グライスはこれには同意しない。)

(ハ) 同内容の自然的意味と発話者意味は共存することがありうる(現に共存している)。

さらに、グライスとニールは次を受け入れる点では一致している。

(ニ) サロメの事例では、グライスの分析の第三条件は満たされていない。

ところで、(イ)と(ニ)を踏まえれば、次の(ホ)が帰結する。そこで、ニールはそれを主張し、グライスを批判している。

(ホ) 発話者の意味にとって第三条件は不要である。

以上の(イ)～(ホ)の内、グライスとニールが明確に対立しているのは(イ)についてであり、そこからの含意として、ニールはグライスに反して(ハ)および(ホ)を主張するに至る。他方、(ロ)のような自然的意味が成り立っていることや、(ニ)については、ニールはグライスに賛同しており、対立はない。

以上と対比すれば、私が探りたい立場は次のように特徴づけられる。私は、大まかないみで(イ)を認めるという点では、ニールに賛同し、グライスに反対する(「大まかな意味で」という限定の意味は後述)。また私は、ニールとグライスの双方と共に、(ロ)を受け入れる。したがってまた、私はニールと共に、大まかな意味で(ハ)を受け入れる。しかし、私の考えでは、(ハ)の意味については、単に二種類の意味作用が共存するというだけでなく、両者の相互関係に踏み込んだ本格的検討が必要である。さらに、私は、ニールとグライスの双方に反して、(ニ)を受け入れない。それゆえに、私は、ニールに反して、グライスと共に、(ホ)を受け入れない。

以上の論旨は、もっと別の言い方をしたほうが分かりやすいだろう。

私は、グライスが挙げた一連の事例や、シファーの挙げた金切り声や「私はここだ」の例において、発話者の意味が成立していないとするグライス流の診断には違和感がある。その点で、私は発話者の意味が成立しているとするニールの所見に賛同する。しかし、問題の事例において発話者の意味が成立すると考える理由については、私はニールの説明は採らない。ニールは、問題の事例では第三条件が成り立っていないにもかかわらず、発話者の意味は成り立っているがゆえに、発話者の意味が成立するためには第三条件は不要だ、と考えた。しかし、私見では、問題の事例においても第三条件は（グライスとはやや異なる解釈の下で）成立しており、発話者の意味が成立する理由も第三条件の成立によって説明することができる。

そもそも、問題の事例群において第三条件が成り立っていない（つまり先の（二）が正しい）と考えるべき理由はどこにあるのか。この問いに対して、ニールは答えを示していない。この点については、ニールはグライスの説明に従っているものと考えられる。しかし、ではグライスの説明はどうだったか。その実質をなしていたのは、信念の理由についての考察である。

第三条件は、発話者が伝えたい内容が、それを伝えたいという発話者の意図に関する知識を理由として相手に伝わることを要求するものである。ところが、問題の事例群では、発話者が伝えたい事柄は、発話者の意図に関する知識を素通りして、自然的な意味作用を通じて相手に伝わっている。相手方には、発話者の意図は知られているが、それは、相手が所期の事柄を信じる理由にはなっていない。つまり、例えばサロメの例で言えば、サロメが《ヨハネは死んだ》と信じる理由は、目の前に生首があるからなのであって、話し手が自分にそのように信じさせたがっているからなのではない。

ここで前提されていると思われるのは、信念の理由が二重に決定されることはないとする想定である。この想定は少なくとも一応の説得力を持つように思われる。したがって私は、まったく同じ内容の自然的意味と発話者意味が共存することは、額面通りには認めがたいと考える。しかし、同時に指摘しておかねばならないが、それは、目下の事例における第三条件の成立を否定する十分な理由にはならない。というのも、発話者が伝えようとしている内容（換言すれば、第一条件の内訳）について若干の見直しを施すならば、目下の問題事例群においても第三条件は成立するからである。

ここで想定している見直しとは、目新しいものではなく、まさに前節で提案したものにほかならない。具体的には、発話者の意味の分析を、図式 (α) ではなく (β) に沿って行い、また適宜態度の顕在性の度合いに配慮するというものである。

その点を念頭に先ほどの叙述に戻ろう。確かに、例えばサロメの事例において、相手に《ヨハネが死んだこと》を信じさせることがヘロデ王の意図した伝達内容だと考えるならば、相手がそのように信じる理由が、それを伝えたいという発話者の意図の知識にあると考えるのは難しい。ヨハネが死んだというサロメの信念は、何より眼前の生首の存在によっているのであって、相手の伝達意図の知識によるのではない。それゆえ、この事例では、《ヨハネが死んだこと》を内容

とする発話者の意味は、グライスの当初の分析に沿う限り、成り立っていない。しかし、発話者が伝えようとしている内容を先の図式(β)に沿って理解するならば、事情は変わる。その場合、伝達意図の中身は、《発話者がヨハネの死を信じていること》と解される。この再解釈の下では、グライス流の分析によって発話者に求められるのは、自分がヨハネの死を信じていることを伝えたいと思うのと同時に、その意図が相手に知られることをも意図し、さらには、その知識を理由に、相手が、発話者がヨハネの死を信じているのだと信じることをも意図する、ということである。そして、いま想定している事例では、これらの要求は実際に満たされる、と思われる。とすれば、当該事例は、(β)に沿って理解された形での発話者の意味の条件を満たしている。そして、そのことは、当該事例において、《ヨハネが死んだこと》を内容とする自然的な意味作用が機能しているという事実と、十分に両立する。

同様の考察は他の類例においても成り立つ。私がX夫人の浮気現場写真をX氏に示すとき、X氏が《妻が浮気している》と信じる理由は、グライスの指摘の通り、その現場が写真に写っていることにあり、私の意図に関する知識にはない。しかし、この場合にも、私が、《自分がX氏の妻の浮気を信じていること》をX氏に伝えようとして意図していること、またその意図がX氏に知られることも承知していることは、間違いない。そして、その知識を踏まえて、X氏が、私がX氏の妻の浮気を信じていると知るに至ることも、発話の際の私の意図の一部であると思われる。それゆえ、浮気写真の事例でも、グライス流の三条件(の改訂版β)を踏まえ、《私がX氏の妻の浮気を信じていること》を内容とする発話者の意味が成立している。目下の事例では、それが《X氏の妻が浮気していること》を内容とする自然的意味と共存しているわけである。

念のため先の金切り声での発話の例も考えてみよう。この場合、私が金切り声で話せるという相手方の信念の理由は、直接には、現に私が金切り声で話しているという事実にある。そして、《私が金切り声で話せること》は、伝達意図の認識を踏まえて伝わるのではなく、私の発話が自然的に意味している事柄に属する。しかし、同時に私は、「私は金切り声で話せる」という発話を通じて、私が、自分が金切り声で話せると信じていることを、相手に伝えようとしており、また、まさに当の発話を通じて、そのような意向を相手に知らせようとしている。さらに、その知識を踏まえて相手が、《発話者は自身が金切り声で話せると思っている》と信じることを、私は意図している。それゆえこの場合にも、《発話者が金切り声で話せること》を内容とする自然的意味に加えて、《発話者が自身が金切り声で話せると思っていること》を内容とする発話者意味が成立しており、それについてはグライス流の三条件が成り立っている。

以上の考察から明らかにように、問題の事例群は、第一条件の内訳に見直しを施すならば、グライス流の分析に沿う形で理解することができる。



## 8 自然的意味の居場所

以上に加えて指摘しておかねばならないのは、発話者の意味と自然的意味の間の緊密な連携関係である。つい先ほど指摘した自然的意味と発話者意味の共存は、単なる偶然ではなく、むしろ一般的条件であるように思われるのである。以下では、それを互いに逆方向に向かう二つの依存関係として整理しておきたい。一方で、(i) 非自然的な意味（なかでも、その典型とされる発話者の意味）は、一定の自然的な意味作用が成立していることを不可欠の成立基盤としているように思われる。また、他方では、(ii) 自然的な意味は、非自然的な意味（あるいは少なくとも、その重要な成分）を、不可欠な背景としているように思われる。

(i) 例えば、ヘロデ王の事例に手を加えて、王が盆に載せて提示したものが、ヨハネの生首でなく、そのお粗末な（というのはつまり、相手方からすぐに見破られてしまう）模造品だったらどうだろうか。この場合、ヘロデ王の側には、自分がヨハネの死を信じていると相手に伝えた意図があり、しかも、その意図が相手方に伝わることも意図されていると考えられるが、しかし、その相手方の知識が、相手方が《ヘロデ王はヨハネの死を信じている》と信じるべき理由になるとは考えにくい（目の前に示されているものは明らかな偽物なのだから）。そして、問題の偽の生首がヘロデ王自身の眼から見てもお粗末なものだとすれば、ヘロデ王にしても、そのような意図を持つのは難しいはずである。他方、問題の生首が明らかに本物ならば、そのことは、ヨハネの死を告げる自然的意味作用の起点として機能するだけでなく、生首を用いた発話行為を通じて、《ヘロデ王がヨハネの死を信じていること》を内容とする発話者の意味の成立を助ける役割も演じることになる。

もっと単純な例を考えてもよい。例えば、ある事例において、次の (a) と (b) の両方が成り立つとしてみよう。

- (a) 発話者が「今日は疲れた」と言い、聞き手がその趣旨を理解する。
- (b) 発話者の口調や素振りから、発話者が疲れていることを聞き手が察する。

この事例では、一方では、(a) の発話を起点に、《発話者が自分は疲れていると思っていること》を伝えようとする意図をベースとした発話者の意味が成り立つと同時に、(b) を通じて、《発話者が疲れていること》を内容とする自然的意味も成立している。こうした二系列の意味作用は、単に両立するだけでなく、連携しあっているように思われる。「今日は疲れた」の発話を聞いた聞き手が、《発話者が自分は疲れたと思っていること》を発話者が聞き手に信じさせようとしていることを認識し、かつその認識を踏まえて実際に《発話者が自分は疲れたと思っていること》を信じるにいたる時、いったい、前者の認識から後者の信念への移行を可能にしているものは何

なのか。それは総括的に言えば発話者への信頼ということになる<sup>46</sup>が、目下の事例では、その信頼を支えているのは、発話者が単に言葉だけでなく、実際に疲れている様子が見えるという事情である。もしも、それに反して、発話者が実際には疲れていない様子が歴然としているならば、聞き手の側に問題の「移行」が生じるのは困難になるだろうし、発話者の側がそうした移行を意図すること（第三の意図）自体が困難になるだろう。

さらに別な例として、「あなたを愛している」のような発言を考えてみよう。

この文の発話が《発話者が自身は聞き手を愛していると思っていること》を内容とする発話者意味を帯びるためには、グライスが想定した三重の伝達意図の成立と並行して、その成立を円滑化する一連の自然的な意味が成立していることが望ましいと思われる。それは例えば、優しい口調や相手を気遣う眼差しなど、愛情の自然な表れとして総括されるような一連の特徴である。他方、もしも、「あなたを愛している」と言いながら、それらしいふるまいが伴わず、むしろ聞き手を軽蔑したり忌避したりする素振りが目立つような場合、おそらく聞き手の側は、発話を聞いても、そこに《発話者が聞き手を愛していること》や《発話者が自身は聞き手を愛していること》を聞き手に信じさせようという意図を認めることはできないだろう。そして、発話者がそのような不信を増大させるような振る舞いを露骨に示す場合には、聞き手は、当の発話を、嘘と露呈することを見越した嫌がらせと思うかもしれない。もしも発話者が、自分の発話にあくまで愛を告げる発話としての性格を持たせ続けようとするのならば、発話者は、見え透いていると言われても、愛情の籠ったふるまいの見かけを取り繕い続けなければならない。それは言い換えれば、《発話者が聞き手を愛していること》を内容とする自然的意味作用の成立を装い続けなければならない、ということでもある。それは愛を告げる発話者の意味が成立するための最低限の条件であるように思われる。

以上の考察を次のように整理しておこう。すなわち、発話者がグライスの三条件に適うような意図を伴う発話を行えるためには、その基盤として、発話者の意味と部分的に重複する内容を持った自然的な意味が(少なくとも見かけ上)、成立していなければならない、と。より具体的に言えば、自然的な意味の基盤がとりわけ重要になるのは第三条件、つまり聞き手が発話者の意図の知識を踏まえて、その意図通りの反応を来すことを発話者が意図するという条件である。発話者がこうした意図を持ちうるためには、前提として、発話者が聞き手側から一定の信頼を得ていなければならない。つまり、発話者が一定の信念を喚起しようとしているという受け手の知識が、受け手にとって、その通りの信念を抱く理由になるものとして受け取られなければならない。だが、そのような信頼が成り立つためには、その基盤として、問題の信念を補強するような自然的な意味作用が(あるいはその基盤となる事実的な連関が)成り立っていないなければならないのである。

46 Grice (1989), pp.294-295. [邦訳278頁。]

(ii) 以上に加えて、もう一つ、自然的意味が発話者の意図に関する知識に大きく依存するという事情についても簡単に確認しておかねばならない。

グライスの観察では、例えばヘロデ王の事例における自然的な意味は、ヘロデ王の伝達意図の知識とは独立に成立するかのよう記述され、ニールもそれを追認している。しかし、ヘロデ王が生首を盆に載せてサロメに示すとき、サロメがそれをスムーズにヨハネの生首だと認識するさいには、ヘロデ王がそれを意図的に示していること、またヘロデ王の振る舞いがサロメとの約束にあるとの推察など、ヘロデ王側の意図についての知識が不可欠だと考えられる。生首は偽物かもしれない、別人のものかもしれない、等々の可能性がスムーズに排除されるのは、問題の場面で働いている多様な意図の知識があるからであろう。

写真の例も同じである。妻の浮気場面を撮った写真をX氏がたまたまどこかで見つけたとしても、X氏がそれを妻の浮気現場の写真であることを直ちに理解できる保証はない。写真の写り具合によっては、X氏はそこに妻が写っていることに気づかないかもしれない。あるいは、それが浮気場面だと気づかないかもしれない。X氏が問題の事例においてそれを浮気現場の写真として察知できるのは、それがY氏によって意図的に示されているという知識によるところが大きい。

さらに、一見単純な自然的意味の事例に思えるかもしれない金切り声の事例でも、それが「私が金切り声で話せること」を意味する事例として理解されるためには、当該事例のもつ多様な側面のうち、特に「私が金切り声で話せること」に注意が向けられるようなしかるべき背景文脈が必要だと思われる。そして、いまの場合、そのような焦点の絞り込みの役割を果たしているのは、何より、「私は金切り声で話せる」という発話であり、またその背景にある「自分が金切り声で話せると私が思っていること」を伝えようという意図の知識である。

こうした事情を考えるならば、自然的な意味の成立は、多くの場合、平行的な伝達意図の存在を抜きには理解できないという点に留意する必要がある<sup>47</sup>。

## 9 まとめ

本稿では、グライスによる「発話者の意味」の分析について、自然的意味との関係という点に焦点を置きながら検討を進めてきた。グライスの分析は三つの条件の提示からなるが、本稿での考察の焦点としたのは第三条件である。本稿の主張では、第三条件に向けられてきた批判は決して致命的なものではなく、むしろ第一条件についての見直しによって解消される。しかし同時に、私の考えでは、同じ考察は、第三条件が実は自然的な意味との緊密なつながりを前提していることをも明らかにする。その点で、本稿の考察は、基本的にグライスの分析を支持するものである

47 この点に注目した先例として菅野 (1999) の第二章も参考になる。「徴候が機能するためには、それが〈記号〉であるかぎり、人間的営為 (human practice) の仲立ちを必要とする」(p.43)。

と同時に、その位置づけに関して、グライスが描いた意味理論の全体構図を見直そうとするものでもある。

## 文 献

- Bach, K., 1987, 'On Communicative Intentions: A Reply to Recanati', *Mind and Language* 2, 141-154.
- Grandy, R.& Warner, R., 1986, 'Paul Grice: A View of his Work', in Grandy, Richard.& Warner, Richard. (eds.) , *Philosophical Grounds of Rationality: Intentions, Categories, Ends*, Oxford: Clarendon Press., pp. 1-44.
- Grice, H.P., 1989, *Studies in the Way of Words*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press. [清塚邦彦 訳『論理と言語』勁草書房, 1998年]
- Harman, G., 1974, 'Review of *Meaning* by Stephen Schiffer', in *The Journal of Philosophy*, Vol.71, No. 7, pp.224-229.
- McGinn, C., 2015, *Philosophy of Language: The Classics Explained*, Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Neale, S., 1992, 'Paul Grice and the Philosophy of Language', *Linguistics and Philosophy*, Vol. 15, No. 5, pp. 509-559
- Recanati, F., 1986, "On Defining Communicative Intentions", *Mind and Language* 1, 213-42.
- Schiffer, S., 1972, *Meaning*, Oxford: Clarendon Press.
- Searle, J., 1969, *Speech Acts*, Cambridge, Eng.: Cambridge University Press. [土屋俊訳『言語行為』勁草書房, 1986年]
- Sperber, D. and Wilson, D., 1986, *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Basil Blackwell.[内田聖二他訳『関連性理論：伝達と認知』研究社出版, 1993年]
- 菅野盾樹, 1999, 『恣意性の神話』勁草書房。

## **On the Place of ‘Natural Meaning’ in Paul Grice’s Philosophy of Language**

Kunihiko KIYOZUKA

Gricean philosophy of language is known for the research program of reducing semantic concepts to psychological concepts. The reduction is presumed to be done in two stages. In the first stage, the concept of linguistic meaning (meaning of word and sentence) is reduced to that of speaker meaning; in the second stage, the concept of speaker meaning is defined in terms of the speaker’s intention. This paper is concerned with the latter part of the theory.

Meanwhile, Gricean theory is also known for its characteristic dichotomies on the concept of meaning. The first dichotomy is between ‘natural’ meaning and ‘non-natural’ meaning. The domain of non-natural meaning is then divided into ‘speaker meaning’ and the ‘utterance type meaning’ (expression meaning), and the latter is further divided into ‘timeless’ meaning and ‘occasion’ meaning. In this paper, I concentrate on the concept of speaker meaning and its relation to natural meaning. I basically endorse the Gricean analysis of speaker meaning in terms of multiple intentions on the part of the speaker. However, I also argue that speaker meaning is, contra Grice, compatible with natural meaning and that the latter forms an indispensable basis for the former.

